
カンピオーネ ~ Campione ~

レグルス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カンピオーネ 〈Campione〉

【Nコード】

N2354E

【作者名】

レグルス

【あらすじ】

自転車好きの高校生が創設した自転車同好会が、高校ロード界に挑んでいくストーリー。

Stage 0：プロローグ

スツ、スツ、ハツ、ハツ・・・

一定の息遣いが今日も聞こえる。

「去年まで」陸上部のルーキーとして活躍していた今川祐太は、今日もいつも通りランニングをしていた。彼は一旦玄関に入った後、別の服装に着替えて、彼の相棒とともに現れた。

ロードレーサー。人の力でどれだけ速く走れるか、その一点を追求した器械。彼はそれに跨ると、すぐさまトレーニングに出掛けた。ちらちらとサイクルコンピューターを見る。

「今日の調子はまあまあだな」
と呟きながらペダルを漕いだ。現在、時速35km。車が疎らに走る早朝の道を、彼は駆け抜けていった。

「ただいま」

そう言つて、彼は制服に着替える。彼の母が言う。

「今日は始業式でしょ。祐太、陸上部辞めて、今度はどの部に入るつもりなの。」

彼はこう答えた。

「ま、お楽しみつて所かな。」

彼は朝食を一気に平らげると、ヘルメットを被り、荷物を背負つて、ロードに跨り家を出た。

「おはよ、石井。」

「オツス、今川。」

石井龍夫。今川の自転車仲間で、何度か一緒にレースに出たことがあった。

「今年は何組だろ。」

と、石井が問う。

「多分今年もA組じゃないか？毎年、特進AクラスはA組だし。」

「そうだな。」

「そういえばさ、昨日俺C、Zの新曲買ったんだよ。」

「マジ！？今川あ、それ聞かせてくれよお。」

そんな会話をしながら、『私立水明高校』と書かれた校門を二人はくぐった。

教室に入り、席に着くと、今川は前々から言おうと思っていたことを、石井に伝えた。

「なあ、石井、唐突な話をするが、いいか。」

「なんだよ、畏まつちゃって。」

一瞬の沈黙の後、今川は口を開いた。

「なあ、自転車同好会、作らねえか？」

二人の間に、不思議な空気が流れた。

Stage 0：プロローグ（後書き）

ども。レグルスです。

前作「峠の覇者」がまったく反響がなかったにもかかわらず、調子に乗って投稿してしまいました。

やっぱり、書きたい。その気持ちに負けてしまいました。この物語、相当長くなると思います。彼らはまだ高校2年生。ここから冬の選抜、高3のIH、そして最後のロードレース「ツール・ド・関東」

（架空のレースです）まで描く予定です。まだまだ文体は稚拙ですが、どうぞよろしく願います！！

Stage 1：同好会設立への第一歩（前書き）

自転車競技同好会を作ろうと目論む自転車好きの高校生、今川祐太とその友人、石井龍夫。ついに、高校ロード界を揺るがすことになる2人が動き出す！

Stage 1：同好会設立への第一歩

「はああああ！？自転車同好会だってえ？」

石井は大声を張り上げて叫んだ。

「ああ。陸上部を辞めたのは、そのためだ。」

「作る気マンマンだな……」

水明高校では、5人会員を集めれば同好会が作れる。明日は入学式。それから1週間は仮入部期間。それを利用して、新生を3人以上集めようという魂胆だった。しかし石井も反論する。

「あのなあ、そんなに上手く行くわけねーだろ。第一、日本におけるロードの競技人口の少なさはお前もわかってるだろ？」

「ああ。俺には秘策がある。まあ見てなつて。」

「……まあいい。お前に任せた。」

「おう」

そして、始業式はあつという間に終わり、HRも終わった。そして今川と石井は、職員室へと足を運んだ。

「失礼します。2年A組の今川です。」

「同じく石井です。」

そして、二人はとある先生に話しかけた。

「あの、あさつての新生オリエンテーションについてなんですけど。」

「何だね」

「部活紹介の時間がありましたよね。その時間に、僕たちが作るうと思っっている自転車競技同好会の時間、割けますか。」

「えええ！？自転車競技同好会を作るう？」

先生は大声を出して驚いた。流石に今川も、ここまで驚かれるとは思っても見なかった。

「今川、もしかして陸上部を辞めたのも…」
「はい。同好会を作るためです。」
「…他の部との兼ね合いもあるから、少し待っていてくれないか？」
「はい。では。」
そうして、二人は職員室を出た。

一時間後

『2年A組の今川さんと石井さん、至急職員室へ来てください』
「おつ、来たか」
二人は職員室へ向かった。先生が待っていた。
「今川、他の部の顧問と話し合ったら、3分間だけ時間が取れた。その時間をやりくりしてくれ。」
「ありがとうございます。」

「なあ今川、なんかすんなりと話が進みすぎじゃないのか？」
「いいじゃねえか。これで部員をあと3人勧誘できればそれでよし。あさつてのオリエンテーションは明日考えよう。」
「おう。じゃあな。」
こうして、二人は自転車競技同好会設立への第一歩を踏み出したのだった。

その夜

ペダルが…動かねえ…クソツ…あと少しだ…踏ん張れ！
「お前、高校生か？」
誰かが話しかけてくる。
「ああ…お前っ…は？」
話しかけてきた相手は、このきつい坂でもだいたいぶ楽そうだ。

「俺の名前は…」

…ハッ。また同じ夢だ。そう思い、今川はこう呟いた。
「奈良県立翔邦高校の山口…か。」

Stage 1：同好会設立への第一歩（後書き）

レゲルスです。

やっと本格的に始動した二人。

これから、あと3人をなんとかして勧誘しなければなりません。どんな感じにするか早く考えないと・・・

Stage 2：揃った役者（前書き）

ついに自転車競技同好会設立へと動き出した2人。ちゃんと部員3人を集めることは出来るのか？

Stage 2：揃った役者

「さて、どうしようか」

「どっつて…」

今日は入学式。すでに式やHRは終わり、皆が帰ろうとしている時間だ。

早速、今川と石井は、明日のオリエンテーションについて考えようとしていた。

「まあ、説明は普通にするとして、問題は服だな。」

と今川が言う。

「なんか制服だと運動部っぽくないしなあ…でもサイクルジャージもインパクト強すぎるだろ。」

そう。サイクルジャージというのは初見の人にはインパクトが強すぎるのだ。特に股間の辺りが…パッドが目立つのだ、非常に。

「だがインパクトというのも大事だと思うのだが。」

「今川、あれは強いとかそういうレベルじゃないって。」

一時間後

「やっぱりサイクルジャージしかないよなあ…」

「消去法ってやつか。石井。」

どうやら石井も気が変わったようだ。

次の日

「只今より、新入生オリエンテーションを始めます。」

と開式の言葉が告げられる。その裏では、部活紹介の面子が準備をしていた。

「さーてと、着替え終わりっ！ロードも持ってきたし、これで準備よしっ！今川、お前も終わったか？」

「おう。俺たちの順番は一番最後。説明の文章も持ってきたし、こっちも準備万端！」

そして新入生、在校生代表挨拶や、校内紹介が終わり、部活紹介の時間となった。野球部を筆頭に、次々と部活紹介が進んでいく。

「よし、次だな、用意はいいな、石井！」

「おう！」

「続いて、今年度より新設される予定の自転車競技同好会の紹介を行います。」

と司会が言う。

「へえ〜そんなのが出来んのか〜」「なんでも作ったのは去年の陸上部のルーキーの今川だとさ！」

「こんにちは。2年の今川です。もしこの同好会が新設したら、私がキャプテンを努めます。」

「んで、俺が副キャプの石井で〜っす。」

「おい、まだ出来ると決まったわけじゃないだろ。…えー、この学校には、同好会を新設する際、5人以上人を集めなければならぬという規則があります。なので、あと3人新入部員が入れば、無事、新設されるというわけです。では、私たちが主に出場する予定のロードレースについて…」

と、説明が数分間続き、最後に、

「自転車に興味のある人、部活がしたいけど自分に合う部活がない人、そんな人へここはお勧めです。是非入部して下さい！」

と、お決まりの文章で締めた。

終了後

「大丈夫かな…」

「何弱気になってんだ？石井。きつと来るぞ。」
「おう」

翌朝

「先生、何人来ましたか。」

二人は職員室にいた。

「今のところ…2人だね。」

「…」

あと一人足りない。

「…その2人の名前、教えてくれませんか。」

「1人は、桜川悠、1年D組。もう1人は、根本靖行、1年C組。」
「わかりました。あと1人何とかして集めます。」

「なあ今川、あと1人どうやって集める？」

「どうって…」

二人は行く当てもないまま、駐輪場を歩いていた。

と、そこにスポーツバイクで颯爽と駐輪場に來た男がいた。

「おい、今の、ロードだよな。」

「ああ、石井、話してみよう。」

「おい、そりゃあいくらなんでも…」

と言いかけたときには、もう今川は走り出していた。

「なあ君、どこか部活には入ってる？」

「いや。」

「ねえ、自転車競技同好会入らないか？」

「新しく出来たのか…昨日、休んでたからさあ。」

石井はホツとした。外見が、いかにも体育会系のゴツい人間に見える
たからだ。

「そうだ、名前、聞いてなかったね。俺は今川で、こっちは石井。」

君は？」

一瞬の沈黙の後、彼は答えた。

「2年C組、つちやたく土谷卓だ。」

ついに「役者」が揃った…
今川はそう思ったのだった。

Stage 2：揃った役者（後書き）

レゲルスです。

ネームを決めようと思っても、考え付くのはレースの展開ばかり。肝心なこの話の展開がまったく思いつきませんでした。これで、自転車競技同好会は無事設立です。ここから、物語が進展していきま
す。あーっ、早くレースが書きたい！

Stage 3：集う5人（前書き）

1年が二人入り、そして2年からも一人が入り、設立することになった自転車競技同好会。ついにはじめてのミーティングが行われる。

Stage 3：集う5人

「じゃあこれで自転車競技同好会は設立ということでもいいね？」

「はい。ありがとうございます。」

「土谷卓…か。一応入部してもらったけど、実力はどうなんだろうな。見た目では、強そうだったし…」
と石井が呟く。

「まあ身長こそ低いが、ガタイはいい。おそらくスプリンターだな。」

唐突ですが、これより

「レグルスのわかりやすいロードレース講座」
をお送りします。

スプリンターとは、主にゴール手前数100mや、コースの途中に設けられる「スプリント賞」の時、一瞬で大出力を出すことで勝ったり、ポイントを稼いだりする選手のことを言うんだ。陸上でいう短距離走の選手だね。

このタイプの選手の多くはガタイがいいんだ。
よい子のみんな、わかったかな？

「おわり」

「でもまあ良かったな今川！これでやっとお前の夢も叶ったわけだ。良かった良かった！」

「いや、まだ夢は叶ってないぜ。」

「え？」

間が空いた後、今川は口を開いた。

「夢は、全国制覇に決まってるだろ、石井！」

放課後

「よし、部員は全員集まったな。まずは、自己紹介だ。左から、クラス、名前、身長、体重、ロードバイクの有無、レース経験について言ってくれ。」

「1年D組、桜川悠。身長167cm、体重53kg。ロードは持ってます。レースは出たことありません。」

「1年C組、根本靖行。身長175cm、体重75kg。同じくロード持ちです。桜川君と同じで、レースには出てません。」

「じゃ、次は2年だ、土谷から。」

「わかった。2年C組、土谷卓。身長173cm、体重79kg。レース経験あり。スプリンター。」

「じゃ、次は石井。」

「副キャプテンの石井龍夫だ。2年A組。身長180cm、体重67kg。レース経験あり。ルーラー。」

「レグルスのわかりやすいロードレース講座」

ルーラーとは、平地を得意とする選手のことを言うんだ。スピードマンと呼ばれることもあるよ。全体的に大柄な選手が多いんだ。平地といっても、ロードバイクはスピードが出るから、空気抵抗は大きい。その抵抗に耐え切るだけの力が必要なんだ。よい子みんな、わかったかな？

「おわり」

「最後にキャプテンの俺だ。2年A組、今川祐太。身長176cm、体重63kg。レース経験あり。クライマー。」

↳レグルスのわかりやすいロードレース講座↳

クライマーとは、登り坂を得意とする選手のことを言うんだ。主に小柄、軽量の選手が多いけど、大柄でも軽量なら問題ない。高い負荷が長い時間に渡ってかかり続けるので、それに耐えるだけの持久力が必要とされるんだ。

よい子みんな、わかったかな？

↳おわり↳

「あとは、顧問の先生で、『書類上は』監督も兼任することになる、須藤先生だ。先生、お願いします。」

「須藤だ。これからよろしく。」

「須藤先生は、ロード練習の伴走もして下さい。俺がよろしくお願いしますと言ったら、その後に復唱すること。」

「はい！」

「よろしくお願いしますッ！」

「『『『『『よろしくお願いしますッ！』『』『』』』』」

須藤は内心心細かった。彼は、今まで「体育会系」というものに縁がなかった。学生時代はずっと文化部で、教師になってからも、運動部の顧問をするつもりはなかった。それが、いきなり運動部の顧問、しかもあくまで書類上だが、監督にも就任してしまった。

(本当に俺が、彼らの面倒を見切れるのだろうか…)
そんな気持ちだけが募るばかりだった。

「俺たちの最終目標はもちろん、全国制覇だ！うちの茨城県の江川学園や、隣の咲山学院、そして、今高校ロード界のトップに立っている奈良の翔邦、東京の清明大付属、京都の京美も全部倒して、俺たちがトップに立つ！それが俺の目標だ。」

もちろん、一年の二人には、今川が並べた高校の名前はあまり聞いたことはない。だがしかし、相当に強大な存在であることは感じ取れた。

「よって、明日からはロードで通学してくれ。そして明日は午前6時半から朝練だ。サイクルジャージを持っている者は出来るだけ持ってくる。なければ、学校のジャージでもいい。ヘルメットはみんな持つてるな。コースは明日の朝説明する。わかったか。」

「……はい！」「……」

「よし、今日は解散！ご苦労様でした！」

「……ご苦労様でした！」「……」

下校中、今川と石井の二人はコンビニで買い食いしていた。

「今日はやけに張り切ってたな、今川。」

「当たり前だろ、やっと夢が叶うチャンスが来たんだ。今はそれに向かって進むだけ。まあ、問題は、あの二人が練習について来れるかだが……。」

「大丈夫さ、あいつらだって自転車が大好きで入ってきたんだ。きつとついてきてくれるさ。」

「よし！明日からは練習だ！うちの高校のどの部よりも練習するぞ！」

(こいつ、いつもは「優等生」だけど、自転車のことになると熱いんだよね……俺もだけど。)

夜

今川は自室にいた。

彼はネットで、春の選抜で優勝した選手の写真を眺めていた。そして呟く。

「やっとお前を倒す準備が出来たぜ、山口。」

Stage 3: 集う5人(後書き)

レゲルスです。

次回でやっと自転車が書けます。早くネーム決めないとな。

Stage 4：初練（前書き）

ついに本格的に始動した自転車競技同好会。そして翌朝、初めての練習が実施されることとなる。

Stage 4：初練

午前6時30分

「入部早々朝練かぁ。ま、運動部だからしょうがないか。」

ロードに跨り、まだ慣れない道を走りながら桜川は呟く。そして、昨日と同じように学校に着いた。

「…まだどの部活も来てないなぁ…。もしかして俺一番？」

少々不安になりながらも、彼は、設けられたばかりの自転車競技同好会の小さな部室へと入っていった。

「…今川キャプテン！石井先輩にえーと…土谷先輩！」

「よっ、桜川。根本はどうした？」

「たぶんもうすぐ来るとお…。」

と言った瞬間、ドアの開く音がした。

「おはようございますッ！」

大声を張り上げて根本が言った。

「遅かったな、根本。」

と石井が返す。そして、今川が、

「よおし！じゃあまだ着替えてない者はすぐにジャージに着替えて

！ロード練習始めるぞ！」

と言った後、

「はい！」と一同が返した。

全員が着替え終わった辺りで、またドアの開く音がした。

「……須藤先生！おはようございます！」「……」

「おはよう。」

「先生、ロード練習の準備が出来ました。伴走、お願いします。」

「わかった。」

「さて、コースの説明をしていなかったな。今からはじめる。」

今日から練習に使うのは、ここから10kmほど離れた森林公園だ。
「
と言いながら、地図を取り出して指差した。

「そして、ここの森林公園の周回コースを数周する。この中には、10%を超える傾斜の坂がある。練習には比較的向いているコースだ。よし、コース説明終わり！行くぞ！」

「……おう！」「」「」

こうして、須藤は駐車場、5人は駐輪場へ向かった。
駐輪場で、石井は今川に小声で話しかける。

「おい、あそこのコースじゃ、1年には結構きついんじゃないのか……？」

「そりゃ俺だって承知してるさ。だが、あのくらいのコースをこなせないと、話にならないだろう。」

「……いや、俺の心配はそこじゃない。きつくてあいつらが辞めてかないか、心配なんだ。俺たちはギリギリの部員数で成り立っている同好会なんだ……」

「だからって、練習を緩くするわけにはいかない。俺たちは、勝つんだからな！」

(やっぱ、こいつは自転車に関しては強烈に熱いんだよね……)

ペダルを漕ぐ音が、まだ夜の静けさの残る街に響く。

この時間は、まだそんなに車通りは多くはない。かといって少なくもないが……。

だが、森林公園は中心部からは大分郊外にある。そこに向かえば向かうほど、車通りは少なくなっていく。そんな中、今川が全員に聞こえるように言った。

「よし、先頭交代の練習をするぞ。」

そこですかさず桜川が返す。

「先輩、先頭交代って、なんすか？」

「レグルスのわかりやすいロードレース講座」

ロードレースというのは、比較的風の影響を受けやすい競技なんだ。だから、数秒、数分ごとに、風を受けやすい先頭の選手を交代し合っただ。これは、味方同士はもちろん、たとえ敵同士であっても、ペースを上げるためにやることが多いんだ。ちなみに、これをわざとしないことを「ツキイチ」と言って、そういった選手は優勝を狙わない、という紳士協定も存在するよ。

よい子のみんな、わかったかな？

「おわり」

「へえ……」

「よし、じゃあ俺たちで手本を見せる。石井！土谷！先頭交代し合っぞ！土谷！前に出ろ！」

「おう！任しとけ！」

土谷はスプリンター。一瞬の力を出すのが得意だが、平地も好きである。

「なあ根本、先輩のスピードが一気に上がったな。」

「でも、普段はこんなスピード、一人じゃ出せないのに、楽についていけるな。」

「ああ。」

二人にとっては初めての体験。驚くのも至極当然と言えよう。

「さ、着いたぞ。」

石井がいつもの優しい口調で言う。

「よし、早速登りだな。石井。」

と、今川が後ろを振り向くと、そこには啞然とした顔の3人が。

「ん？どうした？1年の2人はいいとして、土谷。お前レース経験者だよな……」

一瞬黙りこくったあと、土谷が口を開いた。

「俺……登り苦手というか、嫌いなんだよなあ……」

偶然見かけて勧誘した男の正体。それは、平地と一瞬の力に全てを賭ける男だった。

Stage 4：初練（後書き）

レゲルスです。

やっと書けたっ！自転車を書くのを心待ちにしていた男レゲルス！
さて、今回はヒルクライム特集（嘘）というわけで、さらに張り切
ってしまおうかも…

Stages：問題点（前書き）

初めての朝練。ついに、アップダウンコースの森林公園に一行が着き、練習が始まった。

Stages：問題点

「うひゃあ…」

桜川と根本は啞然としていた。10%を超える斜度の登り。言葉だけ聞くと楽そうだが、実際に目でみるとその険しさに誰もが驚くものである。百聞は一見に如かずとはこの事だ。

「さっ、行くぞ！」

今川の脚質はクライマー。彼は先陣を切って坂を駆け上っていく。登りにおいても、軽いギアで高回転を維持し続ける。それが彼の、いや、登りにおける理想の走り方だ。

石井もそれに続くが、今川の坂におけるスピードには着いていけない。そしてさらに土谷が続く。

土谷の登りにおける漕ぎ方は、グイグイと踏み込んでいく形だった。現在では、古いとされている走り方である。

そして、一年の2人も、土谷をペースメーカーにしながらいっている。桜川はクルクルと、根本はグイグイとペダルを踏む。

「一年にペースメーカーにされるようじゃ、示しがつかねえ…。だが練習はまだ続くんだ、ここで体力を使い果たすわけにもいかんと土谷は呟く。

今川は、後ろを振り返って、こう思った。

（大体、誰を登りで鍛え上げるべきかわかってきたな…）

そして、やっと今川が登り切り、下り始めた。少し遅れて、石井も登り切って下る。

「…いくぞっ！」

石井は叫んだ。

遅れていた3人が登り切った。そして彼らが見たものは、強烈なスピードで坂を下り、今にも今川に追いつこうとしている石井の姿だ

った。

「……はっ……はええ！」

3人も同時に下り始めた。レース経験のある土谷は、石井までとは言わないまでも、相当のスピードで下っていく。しかし、下りでハイスピードを出すことに慣れていない2人はあっという間に遅れてしまう。

「追いついたぜ、今川。」

「またいつものパターンだな。……ん？」

と、今川が後ろを振り返ると、そこには土谷の姿があった。

「すまん、遅れた。」

「初練の割にはやるじゃねえか。」

「俺はレース経験者だぞ？石井。」

「しかし、1年がやはり遅れたな。ま、仕方がないか。これから、みっちり鍛えていくしかないな。」

「せいぜいあいつらが辞めないようにしとけ、今川。」

「わかってらい」

こうして、アップダウンを中心とした森林公園のコースを数周した後、彼らは先頭交代をしながら学校へと戻った。戻ったころには、時刻は8:10となっていた。

「よし、まずはあのコースに慣れることから始めないと駄目だな。放課後も練習だぞ！」

「はい！」

「じゃ、始業に遅れないように！ご苦労様でした！」

「……ご苦労様でした！」「……」

初めての朝練は、それぞれの問題点を浮き彫りにして終わった。

Stage 5：問題点（後書き）

レグルスです。

斜度10%の坂。数字だけ見ると確かに楽そうですね。でもこれが、目の前で実物を見るととても急に見えます。この坂を時速数十キロで下るとなれば、恐怖感は大変なものになります。これを読んでいるあなた、実際に自転車に乗って、坂へ行ってみませんか。

何書いてんだ俺……。俺のヒルクライムの血が騒いでしまったようだ。

Stage 6：クライマーの素質（前書き）

朝の練習で、部員たちの弱点を見抜いた今川は、放課後の練習で登坂の練習をさせることにした。そこで、彼は新たな素質を持つ者を見抜くことになる。

Stage 6：クライマーの素質

「さて、部活だ！」

学校の一連の授業が終わり、ついに部活となる。

自転車競技同好会部室

「放課後の練習でも、同じコースを使う。朝よりも交通量が多いから、先頭交代の時注意しろ、いいな？」

「……はい！」「……」

と、一同が答えたところで、今川がある事を思い出す。

「そうだ、今日が初日ということ、気合を入れるぞ！俺が『水明ファイト』と行ったら、お前らは『オー』だ。いいな？」

「……はっ、はい！」「……」

「水明いーッ、ファイトオ！」

「……オ　　ッ！」「……」

今川が陸上部に居たころは、毎日やっていたことである。

（全く、サマになってやがるぜ、今川の奴。やっぱり、体育会系の洗礼を受けてきた奴は違うな。）

石井は思った。

「着いたぞ！」

朝練をした森林公園である。

「そういえば、どんなメニューやるんですか、キャプテン。」

桜川が聞く。

「あそこの坂を、10本。ビリだった一年は、二年と一緒にもう5本！」

「ええ！？俺は二年なのに、15本！？」

土谷が焦る。

「そつだ。お前は坂が弱点なんだ。例えお前にポーネンもびっくりのプリント力があるうと、坂が苦手では、ゴールスプリントに入り込めない。まずは、スプリント力を上げるよりも、登りをこなせる様にしないと駄目なんだ。」
と今川が返した。

「レグルスのわかりやすいロードレース講座」
今の台詞に出てきた「ポーネン」って誰？って思った人は多いと思う。

トム・ポーネン。彼は2007年のツール・ド・フランスでポイント賞を獲ったり、多くのワンデーレースで活躍している、世界的なスプリンターなんだ。しかしこの前、レース外ドーピング検査でコカインが検出され、2008年の主なステージレースへの出場禁止措置がとられ、またその他のレースの出場も自粛することになったんだ。今年はそのプリントが見られないと思うと残念だね。

「よい子のみんな、わかったかな？」

「おわり」

「わ、わかった。登りをなんとかすれば強くなれるって言いたいんだろ。」

「ああ。それでいい。石井、お前もだからな。」

「むう…俺もかあ…」

石井も、平地は好きだが登りは好みではない。

「根本、お前に勝つっ！」

「お前には負けんぞ、桜川っ！」

一年勢が火花を散らしているようである。

「よし、行くぞ！」

「「「「オーツ！」「」「」

「10本目終わり!」

一番先上がったのはやはりクライマーの今川である。

「終わったあ!」

続いて石井も上がった。そして、驚くべき光景が二人の目に入った。なんと、3番目に上がったのは、桜川だった。

「ゲホツ…上がりい!」

二人は啞然としていた。

(コイツ、クライマーとして鍛えれば、結構なレベルまで行くんじゃないのか…)

今川は考えていた。

4番目にあがってきたのは土谷だった。

「グヘツ…後…5本…か…」

その後ろに着いてきたのは根本。

「…」

話す気力すら無くなってしまったようだ。

「よし!石井と土谷、根本はあと5本!」

「…おう!」

桜川は、ホツとした顔をしていた。

「そして、俺と桜川はあと10本だ!石井、土谷、根本は5本終わったらコースを3周すること!」

「ええ!?聞いてませんよキャプテン!」

先ほどのホツとした表情はどこへやら、困惑した顔をしていた。

「理由は後で話す。よし、始め!」

「キャプテン、なんで俺たちだけ多いんですか?」

「お前は、優秀なクライマーになる素質があるからだ。」

桜川はポカンとしていた。

「優秀な…クライマー？」

「そうだ。」

今川は、そりゃ当たり前だろうという顔をしている。何せ、土屋は登りが苦手だったとはいえ、桜川は先輩に勝ってしまった。しかも練習一日目にして。

「さっきの結果も確かにそうだ。だが、お前はもう一つ、優秀なクライマーとしての素質がある。」

「なんすか？」

「小柄で軽量な図体だ。この一点で言うなら、俺よりも素質があると言えるだろう。」

クライマーには、得てして小柄で軽い選手が多い。

「桜川、お前、中学のとき、何cmあったか？」

「中一のときから、この身長です。」

「やはり…お前には素質がありそうだな。だからこそ、山で強くなるために練習を行う。わかったか。」

「…はい」

こうして、二人は練習メニューをこなし始めた。

全員が練習メニューをこなし終わり、彼らは学校へと帰ってきた。

そのころには、全員が滝のような汗をかいていた。

「うわっ…なんちゅう汗かいてんだよ、自転車競技同好会の連中…」
他の部の部員が驚くほどの汗だった。

伴走として練習についていった須藤は、彼らを見て、やはり自分と彼らには大きな隔たりがあると感じていた。そして、激しい練習を部員たちに科しながらも、上手く彼らを励ましてやる気を起こさせる今川の姿に、やはり自分より、彼のほうが監督には向いているとも思ったのだった。

「……………ご苦労様でしたッ！……………」

「なあ今川、久々に牛井屋でも行くか？」

「ああ、行く行く。」

今川は、部活が終わるといつもの顔に戻る。そんな人間なのだ、彼は。

「へいお待ち！牛井二つ！」

「「いただきますっ！」」

街に昔からある牛井屋に二人はいた。

「いやあ、やっぱりうめえなあこの牛井！そう思うだろ石井！」

「うん！病み付きになるよなあ！」

「褒めすぎだつて、君たち！」

決して大きい店ではないが、味は一級品である。

そのとき、唐突に石井が自転車競技同好会の話を振った。

「そういえば、今日の練習、桜川がすごかったな。」

「ああ。まさか土谷を抜くとは思わなかった。やはり、才能というか、それに近いものを感じるな。」

「土谷、登りをなんとかして強くすればなあ……」

「スプリンターとっていたが、スプリント力はどのくらいなんだろう…：早めに確かめる必要がある。来月には茂木で初レースだからな。」

茂木。ホンダが所有するサーキット、「ツインリンクもてぎ」がある町である。そこで毎年春に自転車の耐久レースが開催されているのだ。

「今川、オーダージャージは間に合うのか？」

「もう注文した。たぶん、間に合うだろう。少なくとも、6月のIH予選には絶対間に合うはずだ。」

「そうか…。インターハイか…：関東大会からだろ？自転車は。」

「ああ。ピストも用意しなくちゃな……」

「レグルスのわかりやすい自転車競技講座」

ピストとは、ロードバイクと違って、トラックで行われる競技、たとえば競輪などに使われる自転車のことを言うんだ。トラックレーサーとも言われるよ。

実はこの自転車にはブレーキがなくて、あと、ギアとタイヤが直結しているから、タイヤが回ればペダルも同時に回るよ。

インターハイでは、ロードとトラックでのポイントを合計して順位が決められるんだ。そして、関東大会におけるポイントが、各県で1位になった高校が、全国へ行けるんだ。

よい子のみんな、わかったかな？

～おわり～

「ま、兎に角やることは一杯だ。気合入れていくぞ、石井。」

「ああ。そういえばさ、昨日の『エンタの頂』見た？」

「やつべ、見そびれた！どんなだった？」

自転車の話題が終わると、彼らは普通の高校生となる。

こうして、彼らの一日は過ぎていくのだった。

Stage 6：クライマーの素質（後書き）

レグルスです。

森林公園と名のつくところの舗装路は、厳しい坂があります。

宇都宮市の森林公園に至っては、ツール・ド・おきなわと並ぶ日本のワンデーレースの最高峰、ジャパンカップに使用されているくらいです。ちなみにその傾斜は14%。聳え立つ壁と言ってもいいかもしれません。

しかしこのくらいで驚いてはいけません。ヨーロッパのグランツールの一つであるジロ・デ・イタリアには、山岳コースの一部になると22%という傾斜の道があるのです。どんなものか、体感したくはありませんか？

え、ない？うーん…今日もヒルクライムの血が騒いでるかな…。

Stage 7 : 3日前(前書き)

一ヶ月間、水明高校では一番厳しい練習を積んできた自転車競技同好会。そしてついに、初のレースまであと3日に迫った。

Stage 7 : 3日前

新学年が始まってから早一ヶ月。それは、自転車競技同好会設立からも一ヶ月が過ぎようとする月でもある。

「今川！ユニフォーム届いたぞ！」

「おお！そりゃ良かった！」

ツインリンクもてぎで開催されるレースまであと3日。ギリギリのところ、やっとユニフォームが届いた。

5月にやることはたくさんある。先ほどのユニフォームもそうだが、高体連への登録もしなければならぬ。そして何といても、各地でレースが本格的に始まる時期でもある。ヨーロッパではジロ・デ・イタリアが始まり、こちらでもこのレースやIH予選がある次期である。

備考：本来、もてぎのレースは4月に行われるのですが、彼らにユニフォームを着させるために5月に行われるという設定に勝手にしました。

今川は部員全員を集める。

「この一ヶ月、俺たちは出来るだけの練習をしてきた。うちのどの部活よりも早く練習を始め、どの部活よりもたくさん汗をかいた。」
部員たちが頷く。

「それぞれの弱点も、まだ完全ではないものの、少しずつ克服してきている。そしてそれぞれの長所も伸ばし始めている。」

また、部員たちが頷いた。

「万全の練習はしてきた。そしてあと3日で、それを始めて試して弱点を今一度見直すチャンスだ！これから3日間は練習強度を減ら

していく。万全の状態でレースに望むんだ！いいな！」
「……はい！」

桜川と根本は2人きりでいた。2人きりでいるのは初めてである。

「初レースか…」

「ああ…」

「デビューって感じしないな…根本。」

「デビューって言ったって、たかだか市民レースだろ？まだIH予選までは一ヶ月あるし。」

「インターハイか…俺には、縁のない響きだと思ってたんだがな。」

「え？桜川、お前って中学のとき部活やってなかったのか？」

「ああ。」

彼によると、中学時代は部活はやってなかったという。自転車は中学時代から好きだったようだ。

「いいよなあ～お前の学校は！うちの中学なんか、男子は運動部へ入部するのが義務だったんだぞ！だから陸上部に入ってたけど、全然駄目！それで、自転車を親父に譲ってもらってから、自転車始めて…ってわけ。」

「へえ…」

会話はそこで止まってしまった。

「桜川」

「なんだ」

「全国…行けるかな。」

「行けるさ…たぶん。」

三日後

午前5：30

「着いたぞ！」

一行はついに辿り着いた。初レースの行われる、ツインリンクもて
ぎ。

Stage 7 : 3日前 (後書き)

レグルスです。

今回は今一だったかな…レースが書きたくてしょうがないので、少々突っ走ってしまいましたね。でもご安心ください、次からはレースです。気合の入った文章が見れることかと思えます。

Stages : 轟砲 (前書き)

ついにまでびで行われるレースの日がやってきた。

Stage 8 : 轟砲

「おっ！今年は去年よりさらに人が多いぜ！」

「本当だな」

今川と石井が口々に言う。

「俺も去年来たけど…緊張でほとんど覚えてないなあ…」

土谷も来ていたようだ。

「うわあ…人とメーカーのテントが一杯だあ…」

「キ、キャプテン！」

「どうした、根本」

「あれ、高校生じゃないですか…」

高校の名前が入ったジャージを着ている。

「ありゃ…咲山高校の芝田伸二だな。…あれでまだ2年だぜ。」

石井が割り込んだ。芝田の周りにはマスコミが。

「全く、ちよつとイケメンだからって、マスコミにちやほやされや

がって…」

石井が嫉妬したようだ。

「確かに。うちはメガネ主将にノッポにゴツイ男…」

「そ、それ以上言うな…」

土谷が止めに入る。

「ま、それはさておき、プロの選手もいますね。」

「ああ、あれは招待選手だ、桜川。右にるのがブリジロックの里内選手、真ん中がスキル・シマダの坂野選手、左が、エキップアクタの武田選手だ。ま、どれもそこそこ活躍している選手だな。あの3人は6時間部門に出る。」

「先輩と同じ部門ですね。僕ら1年は4時間ですけど。」

このレースには、2時間、3時間、4時間、6時間の部門があるのだ。

「おっと、あと1チーム忘れてないか？水明高校の今川キャプテンとやら。」

気がつくのと、後ろには坊主頭の男が立っていた。

「お前は…」

「知らんのか？江川学園の尾田道信。お前と同じ、2年だ。このレースには俺だけの参加さ。」

江川学園。毎年茨城県からIH出場を多くの種目で決めている。

「そう簡単に勝たせると思うなよ…」

「出来たばかりだからってナメてるな？痛い目にあうぜ。」

今川と尾田が激しい火花を散らしていた。

「おい今川、そろそろ準備しようぜ。レース開始まであと1時間だ。」

その雰囲気打ち壊そうとして、石井が間に入る。

「待つてるよ、今川。」

「その台詞、そのままお前に返す！」

5人は、ミーティングをしていた。

「…とまあ、4時間部門では、まず完走を目指すこと。いいね。」

「はい」

2人が返事をした。

「そして6時間部門。第一目標としては、あの招待選手3人にきちんとなつていくこと。そして第二目標は、個々の弱点をこのレースで浮き彫りにして、IH予選までの1ヶ月の間に解決することだ。」

IH予選…その言葉が全員に重くのしかかる。

「そして今日の最大の目標は…もちろん優勝だ！そのくらいの気持ちで行け！」

「おっ！」

石井と土谷が応じる。

そして、5人が円陣を組む。そして一瞬忘れかけられていた須藤も

入る。

「ガンバルゾオツ！」

「oooooooooooooo」

>6時間部門に出場する人は、招待選手から順番にスタートラインについてください。<

マシンの手入れはした。練習もした。休息もしっかりとった。疲れは残っていない。今のところ、万全の状態と言えるだろう。今回のレースでは特にエースを決めてはいない。目的が違うからな。…なに今更心配してるんだ。やれるさ、絶対にな。

今川はそんなことを思いながら自転車に跨った。

6時間部門に出場するメンバーのゼッケンは、

水明高校

今川37番、石井38番、土谷39番

江川学園

尾田198番

咲山学院

芝田112番

となった。

>さあ、いよいよレースのスタートです。実況は私眞田、解説は牧洋平さんにお越しいただいています。よろしく願いします<

>よろしく願いします<

実況と解説の声が聞こえる。しかし、心臓の音のほづが大きくなつていく。スタート前の、独特の沈黙。

ドクッ
…

ドクッ
…

ドクッ
…

パン！

6 時間に渡る、長いレースが、今スタートした。

Stage 8：轟砲（後書き）

レゲルスです。

スタート！というわけでレーススタート！これから6時間に渡るながーいながーい戦いが始まるわけです。登場チームは3チームプラスプロ。これだけ書くのも大変なのに、話が進んだらもっと書くことになりますから、頭がこんがらがっちゃつかも…

Stage 9 : 存在感 (前書き)

ついにツイリンクもてぎでのレースがスタートした。先頭集団にしっかりとついていく高校生グループ。そんな中、このレースを見に来ている3人の男がいた。

Stage 9：存在感

6時間部門に参加する383人の大集団が動き出した。

「いい位置…取った！ここからなら、プロの奴等にも着いていきやすいだろ。」

石井が今川にそういう。今川は、

「どうやら、他の高校も同じ事を考えているようだな。」

自分たち3人から見える位置に、咲山の芝田らや、江川の尾田らがいる。

「プロの奴等についていかなくちや、芝田や尾田とは戦えないな、おそろく。」

土谷もそう言った。

「よし！何としても集団から抜け落ちるんじゃないぞ！」
今川は喝を入れた。

6時間部門のスタートから3分後。

4時間部門がスタートしようとしていた。

「なあ根本、ちゃんと完走できるかな。」

「できるさ。そう信じるしかないだろ。」

「ああ。」

そんな会話を2人は交わしていた。

そして、今日2回目の轟砲が鳴った。

そのころ、6時間部門の先頭集団は早くも絞り込まれ、30人程度になっていた。

「ほう…今年は高校生が結構いるじゃねえか。」

招待選手の坂野が里内に話しかけた。

「ま、どこまでついてこれるかな。最後までついてこれたら、大し

「たもんだ。」

「レグルスのわかりやすいロードレース講座」

「違うチームの選手が気軽に話しているのを見て、不思議に思った人も多いんじゃないかな？」

「ロードレースでは、たとえ違うチーム同士でも協力して集団を引っ張ったり、逃げを決めようとしたりすることがあるんだ。よい子のみんな、わかったかな？」

「おわり」

「調整目的とはいえ、手を抜く気はないぜ、俺は。」
と、武田も言った。

「時速40km…平地としては結構出てるんじゃないか、今川。」

「いや、プロにとっちゃ、まだ平地としては序の口だろう。石井。」

「実際、プロのロードレースでは平地で時速40、50kmはざらである。もちろん、高校生にとっては、決して楽なスピードではない。」

「今川、坂が見えてきたぞ。」

「土谷が今川に伝えた。土谷の顔は、意外だなといった感じだった。」

「F1などのサーキットは、一般の人が思っているよりもアップダウンがある。これは足に應えるコースだということを意味しているのだ。」

「今川祐太…か。」

「芝田が、そばを走っている同級生の高井に言った。」

「知ってるのか？芝田。」

「知ってるも何も、あいつは去年のジャパンカップで強烈な存在感を見せ付けたんだよ…」

高井は去年のジャパンカップは参加していなかったのだから知らないよ
うだ。

「何があつたんだよ、芝田。」

こういつた田舎の、しかもサーキットで行われるロードレースへ足を
運ぶ観客は、あまりいないものだ。だが、そんな少ない観客の中
に、学校のものと思われるジャージを着ている男が2人、そしてス
ーツを着た中年の男が1人いた。そして、真ん中にいる男が口を開
いた。

「へえ、また強くなってるな、今川。」

Stage 9：存在感（後書き）

レグルスです。

ついにライバル登場！ということで、少しずつ物語の主要メンバーがそろいつつあります。

今回咲山学院の一人として登場した高井という選手、実は執筆中に思いつきました。…なんか思い入れが出来ちゃいました。

Stage 10：今川の過去（前書き）

去年のジャパンカップに出場していたメンバーたちにより、今川の過去が明かされる。

Stage 10：今川の過去

「あいつは、あの山口と、ジャパンカップの山岳で対一でやりあった男だ。」

「ええ！？あの山口！？翔邦の？」

芝田と高井が話している。

(…なんか噂されてるな)

もちろん今川の気づかないわけではない。(特に高井の大声のせい)

「去年のジャパンカップのチャレンジ部門でのことだ。」

その年、参加していた高校生は俺、山口、今川、そしてあと2人くらいいたかな…。ジャパンカップの山岳の傾斜は結構きついから、集団もだいたい崩れていた。先頭集団にいた俺は、後半の平地に脚を残しながら上っていた。その時だ。アタックしたやつがいたんだ。

それが、今川だった。

そして、そのアタックに乗ったのが山口。今川はすぐに山口に追いつかれ、追い抜かれていった。だが…」

「だが？」

「俺が完全に振り切ったと思ったところだ。一時は俺の視界から消え去っていた今川が一気に追いついた。そして、山岳のトップを取ったのは、奴だった。」

山口が、自分より少々背の低い男に話していた。

「へえ、でも山口先輩、その今田だか何だかって選手、平地ではどうだった？」

どうやら、山口の後輩のようだ。山口は2年なので、彼は入部した

ての選手であろう。

「ま、今川はそのあと特に目立ったアタックとかはしなかった。最終成績は俺が7位、奴が15位。そこそこのいい順位だった。」

「ほう、でも、この天才ルーキー東海林、いつも先輩と練習してますからねえ、ま、山岳で俺とやったらコテンパンにしてあげますよ。」

「そう、彼は翔邦高の1年、東海林史憲。自称天才ルーキー。だが、中学時代にレーシングクラブのエースとして活躍した経験があり、その自信は決して過信や妄想といった類ではない。」

「下手な過信は禁物だぞ、東海林。だが、入部早々山口についていけるとは、まさか私も思わなかったがな。うちの3年でもついていけない奴がいるほどだ。」

「もちろんです監督！天才ですから！ナハハハ！」

翔邦を去年のインターハイ、選抜優勝に導いた監督、更級。観客として3人はレースを見に来ていた。

レースが始まって、すでに2時間が経とうとしている。

4時間部門に出場している桜川と根本は、第二集団につけている。その横を、6時間部門の先頭集団が通り過ぎていった。

「やっぱり先輩たちは速いなあ。」

「でも桜川、なんかつまらないな。先輩たちなら、なんかアタックを仕掛けそうな感じがするんだが……。」

その根本の予想が、まさか当たるとは、誰しも思わなかっただろう。

「なあ、今川。前に誰かが言ってたんだ。最近のホビーレースは、アタックが全く出なくてつまらないんだとさ。」

「ほう。」

「変にヨーロッパのレースを意識して、果敢なアタックが出ない。そんなアタックが出たほうが面白いって、言ってた。」

「なにが言いたいんだよ、石井。」

「 ちょっと、
行アタックしてってくる」

Stage 10：今川の過去（後書き）

やっと今川の過去、そして新たなキャラ登場！

東海林は、企画段階から「やっぱ、こういう『自称天才』みたいなキャラは必須だよな」ということで用意されていました。やはり、いろんなところにSLAM DUNKの影響入りまくりですね。スラダンは私の大好きな漫画ですから…。

次回からは、水明メンバーのマシン紹介でもしていきたいと思えます。

打ち切り（前書き）

打ち切りッ！

打ち切り

なんだろう・・・

新しいネタが思いつかなくなったので

打ち切り

とします。ご愛読ありが(以下省略

小説は600文字以上らしいので埋め合わせ。

ああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああああ

あああああ

ああああああああああああああああああああああ

あああああ

ii

iii

ii

iii

お

お

お

お

お

お

お

お

え

え

え

え

え

え

え

え

う

う

う

う

う

う

う

う

い

い

い

い

打ち切り（後書き）

打ち切りッ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2354e/>

カンピオーネ ~Campione~

2010年10月30日10時26分発行